

歳時 世相篇 17

一九三四年夏、アメリカ合衆国のアーカンソー州で小さな言語学の講習会が開かれた。受講生は二名。この「キャンプ・ウィクリフ」は、その後毎年開催され、形を変えながら現在まで続いている。

夏に開催されることから「夏期言語学講座 Summer Institute of Linguistics」と呼ばれた通称名が、やがて団体の名前となった。現在の正式名称は長年親しまれてきた頭文字をとった呼び名SIL（エス・アイ・エル）を継承し、「SILインターナショナル」となっている。

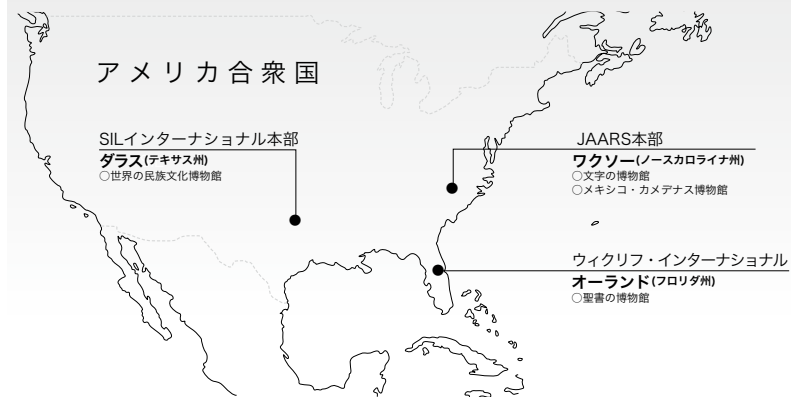
NPBYD

いろいろな言語の発音を記述するのに使われる国際音声字母（IPA International Phonetic Alphabet）。SILがウェブ上で提供するフォントをつかえば、コンピュータ上で簡単に扱うことができる。辞書をつくるなら、ツールボックス（toolbox）。

テキストを入力したファイルと連動させると、自動的に単語ひとつひとつに訳をつけてくれる機能もある。こちらもSILのサイトから無料でダウンロードできる。世界のどこでどんな言語が話されており、話者がどれくらいいるのかを知りたいときに参照する『エスノローグ』（Ethnologue）もSILの編集だ。

SILインターナショナル 夏期講座から世界の言語研究へ

世界のどの地域へ現地調査に行っても、その名を耳にせずにはすまない団体がある。SIL（エス・アイ・エル）インターナショナル、もとの名を「夏期言語学講座」。世界各地に散らばるSILメンバーからの情報と彼らを支える技術は、大学を拠点とする研究者にとっても欠かせない存在となっている



約四年ごとに発行されるが、最新版には、地域と国ごとに整理された六九〇九言語、現地名や方言名などを含めると、なんと四万一一八六言語についての情報が記載されている。こちらもウェブ版なら誰でも閲覧できる。そう、SILは、NPO（非営利団体）なのだ。「夏期講習」はそもそも、世界のすべての人びと、とくに書記法をもた

技術協力をする同じくNPO団体JAARSである。

JAARSは、翻訳活動に必要な技術サポートを行う団体で、もとの名であるJungle Aviation and Radio Service（未開発地航空通信事業部）が示すように、小型航空機による輸送と通信技術の提供からはじまった。

たとえば、一九六〇年代のフィリピン。山を越え谷をわたって目的の村にたどりつくところから話が始まり、やがて滑走路をつくるための交渉をはじめ。ところが最初の候補地では、交渉中に喉が腫れあがって高熱を出し都市部までかつぎだされるはめに。村人たちによると、「所

有者のなかに土地を手放すのを嫌がる者があり、呪文をかけられてしまった」。第二候補地には聖なる松の木が何本かあったが、こちらは現地の習慣に従って神々に豚を献呈することで無事終了。晴れて飛行機が往来することになり、無線とあわせて有事の折にはすみやかに外部と連絡をとることができるようになった。時代がすすむにつれ、必要とされる技術もコンピュータのプログラミングや現地でのメンテナンスなどを含み多様になった。現在、JAARSの本部はノースカロライナ州に位置しており、翻訳者が技術サポートや研修を受けるための宿泊施設や、

「文字の博物館」、「博物館」などもある。敷地内に小型飛行機が離発着するための滑走路があることはいうまでもない。

研究と、現地の人びと

日本に住んでいる私たちは、文字があつて読み書きを習得することを当たり前のように感じている。ところが、世界には歴史や知識を、書くという手段ではなく口承により伝承してきた民族も多い。文字を知っている、それは公用語や話者の多い言語を書くための手段であることが多く、イコール自分の言語が書けるということではない。

SILは聖書の翻訳を通して、少数民族の言語や文化に貢献することを目的とする。

そのために翻訳者は、研究者の現地調査同様、現地の人びとのなかで暮らし、言葉や文化を学んで分析し、その言語に合う正書法を確立する。言語学者であれば、ここからさらに学問的な言語の分析を続けることになるが、SILのメンバーは、聖書の翻訳をすすめると同時に現地の人びとに読み書きを教えることとなる。また以前であれば、希望する者は医療技術の研修を受け

菊澤 律子

きくさわ りつこ
民博 先端人類科学研究部
専門は、主としてオーストロネシア諸語を対象とする歴史(比較)言語学や記述言語学的研究、文法変化に関する理論研究、言語からみたオセアニアの先史研究など。

ない言語を話す人に「自分の言葉で」書かれた聖書を届けるため、翻訳者を志す人に必要な研修を行う目的ではじまった。「キャンプ・ウィクリフ」の名は、聖書を最初に英語に訳したジョン・ウィクリフにちなんだものである。その後、徐々に規模を拡大し、研修生や関係者によって、現在では七〇か国で二五五〇言語の調査や翻訳が進められている。

信念とそれを支える団体

今でこそ、少数民族言語の記述の必要性が世界中で謳われているが、少し前までは、話者数が限られているような言語の文法書を書くことについての価値があるのかを一般の人に説得するのはとても難しかった。そんな時代からコッcottと翻訳を進めてきたSILの活動を支えてきたのは、「聖書の言葉を世界の人に届けたい」という思いと、そのため

することもでき、現地の人々の治療も行った。

ワールドワークの成果をどのようにに現地社会に還元するのか、は、言語学者に限らず現地調査をするもの共通の課題である。SILの経験に学ぶものもありそうだ。一方、近年では、SILのメンバーが大学の博士課程で言語学の学位をとったり、国際学会で研究発表をすることも珍しくなくなった。

なお、SILの翻訳者は、団体内ではリングイスト（linguist、言語の専門家）と呼ばれ宣教活動は行わない。これは、宗教や信条の異なる世界各地で識字教育に携わるために必須の条件であることは想像に難くない。宣教活動は姉妹団体であるウィクリフ・インターナショナルの担当となる。

フロリダ州にあるそのウィクリフのデイスカバリー・センター、通称「聖書の博物館」によると、聖書の完成版がある言語は現在四二九、部分訳が一九九九。残りの約四五〇〇言語はまだなにもない。それらの言語を話す人びとに自分たちが信じるものを届けたい、という思いが続く限り、SILインターナショナルの任務は続く。

そしてこの夏も、ノース・ダコタ大学でSILの講師陣を中心とした「夏期講習」が開催されている。

識字教育は大切な使命のひとつ。
(フィリピン・ルソン島北部ポントックにて。Lawrence A. Reid 提供)

